# 日本人学校教員はどのような環境移行を経験するか？

## Auto-TEM を用いた探究

Environmental Transitions of Teachers at Japanese Overseas Schools: An Auto-TEM Approach

土元哲平

Teppei TSUCHIMOTO

（立命館大学 OIC 総合研究機構）

(Research Organization of Open Innovation & Collaboration, Ritsumeikan University)

Key words:日本人学校教員, キャリア, Auto-TEM

### 目的

本研究では、日本人学校教員が海外勤務を契機とした環境移行を通じて、いかなるキャリア目標を生み出し、キャリアを形成しているのかを探究する。日本人学校は、親の都合などにより海外で生活する義務教育段階の子どもに対して、「日本国内の小・中学校における教育に準じた教育を実施することを目的」(文部科学省, 2021)とした、在外教育施設である。日本人学校の構成員が多様化・多文化化する中で、日本人学校教員のキャリア発達をどのように支援していくのか、という点が喫緊の課題となっている。なお、キャリアは「生涯の過程を通じて、ある人によって演じられるいくつかの役割の組み合わせと連続」(Super, 1980)と定義される。これまでの日本人学校に関する研究の焦点は、地域の特徴や歴史といったマクロな視座から学校の特徴の考察や、海外子女（子ども）の学校適応、文化変容に向けられていた。しかし、従来の研究が、「子ども」や「学校」を主な対象としてきた一方で、「教員」にフォーカスを当てた研究はその蓄積に比べると手薄である（芝野, 2021）。日本人学校教員に対する研究自体が限られているため、そのキャリアの探究も、ほとんどなされていない。

### 方法

アジア圏にある日本人学校（A 校とする）に勤務する教員を対象に、文化心理学の方法論 Auto-TEM（オートエスノグラフィー的複線径路等至性モデリング；土元, 2022）に基づいたワークシートによる調査を実施した。Auto-TEM は、研究者自身や周囲の人びとの人生径路と、その径路に関わる社会文化的なガイドを 2 次元で描く方法である。本研究では、教員（協力者）本人が自らの人生径路をワークシートに描く Auto-TEM を実践した。

具体的には、まず A 校での勤務最終年度にあたる教員に対して「帰国前調査」を実施し（参加者 8 名）、その後、2 名の参加者に対して、2 年半後に「帰国後調査」を行った。また、帰国後調査に関しては、インタビューも実施した。本研究は、立命館大学人を対象とする研究倫理審査の許可を得て実施し、調査に際しては協力者に説明に基づく同意を得た。

### 結果

本研究の協力者は日本人学校でのキャリアを、主に①と②に向けて意味づけていた。なお、それぞれについて語りから以下の点が明らかになった。

**① 教師としての力量形成（例：国際協力や日本語指導）**

日本人学校は教師の力量形成にとって重要な場である一方、海外という特殊な環境が生む閉鎖的な関係性から、困難さを抱える教員もいることが明らかになった。

**② 帰国後の広い意味での教育への還元（例：学校経営や人材育成）**

日本人学校での学びを帰国後に国内教育へ活かそうとする際には、学校組織のシステムや子どもたちの多様性の違いから、ギャップや抵抗を感じる場合があることが示唆された。

### 考察

日本人学校教員が経験する「環境移行」は、日本人学校での勤務をキャリア上の契機として捉える源泉となる。地理的離れた環境での教育経験は、日常的な教育経験からの心理的な距離化をも促すことが示唆される。さらに、とりわけ日本人学校での教育経験は、その国、地域、教師、子ども、家庭などが構成する教育環境の全体性と局所性に向き合う姿勢を促していると考えられる。このような点で、日本人学校は、自らの教育経験を相対的に理解することに繋がるという意味で、教師のキャリア発達にとって重要な局面となる。

### 参考文献

芝野 淳一. (2021). 帰国した在外教育施設派遣教員の研究に向けた予備的考察：教師の「越境性」に着目して. 中京大学大学院社会学研究科 社会学論集, 20, 91-111.

Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16(3), 282–298.

土元哲平. (2022). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. ナカニシヤ出版.